

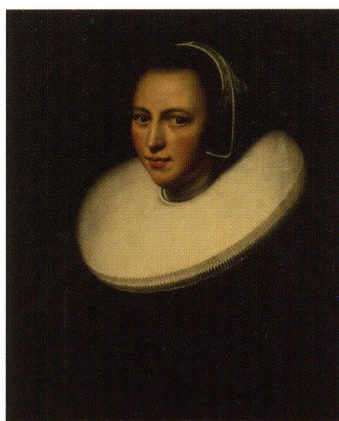
誌上 ギャラリートーク

Gallery Talk

01

カンヴァスに描かれた女性たち

会期 2010年4月16日(金) ▶ 5月30日(日)



レンブラント・ファン・レイン
《髷襟を着けた女性の肖像》1644年
ヨハネ・パウロII世美術館蔵

本展は、15世紀ルネサンス期から19世紀にいたるヨーロッパ絵画史における女性像の変遷をたどるもので、ポーランドのワルシャワにあるヨハネ・パウロII世美術館のコレクションから、聖母子像や神話と伝説、気品を漂わせた貴婦人の肖像画など、個性豊かに彩られた女性表現の数々をクラーナハ、ヴァン・ダイク、レンブラント、ゴヤなどの作品61点で紹介いたします。

その中からレンブラントの作品をご紹介します。17世紀オランダを代表する画家、レンブラントは、近世絵画史上の名作《夜警》(1642年、アムステルダム国立美術館蔵)にみられる、巧みな空間構成や、鋭い心理描写の表現で有名ですが、2年後に描かれた《髷襟を着けた女性の肖像》も色調や光線の扱いが独自の効果をうみだしているレンブラントの名品の一つです。モデルの女性は大ぶりの髷襟(ひだえり)を着け、結い上げた髪をまとめる帽子を被りポーズをとっています。髷襟は16世紀から17世紀にかけて流行したファッションであり、この衣装から、彼女がある程度経済力のある身分の女性であることがわかります。また、暗色の背景に、わずかに横を向きながら正面を見つめているモデルの顔全体に光をあてることによって、モデルの微妙な心理描写を表現しています。

会場には同時期に活躍したヴァン・ダイクやムリーリョといったバロックの巨匠たちも展示されています。ルネサンスから近代に至る絵画のなかの女性像の移り変わりをお楽しみください。

[高松市美術館学芸員 川西弘一]

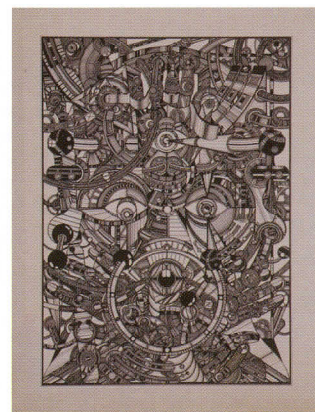
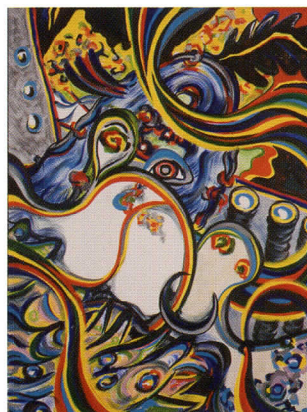
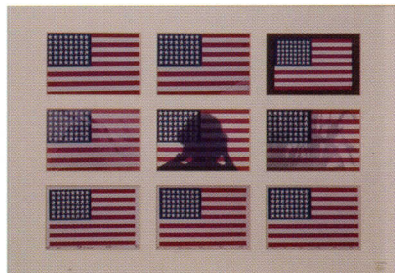
02

瀬戸内国際芸術祭 2010 連携

森村泰昌モリエンナーレ／まねぶ美術史

会期 2010年7月17日(土) ▶ 9月5日(日)

図版左から 森村泰昌氏
森村作品(ジャスパー・ジョーンズ風、岡本太郎風、デューラー風)



森村泰昌といえば、名画の登場人物や女優などに自ら扮した肖像写真で知られます。その実質的なデビュー作品は、1985年の《肖像(ヴァン・ゴッホ)》(高松市美術館蔵)ですが、じつは、それ以前にも膨大な数の興味深い作品群が生み出されていました。それはダ・ヴィンチからデューラー、カンディンスキー、岡本太郎、赤瀬川原平まで、様々な巨匠たちのスタイルをまねて描いた作品で、それらは今まで全く公開されず、森村の自宅で大切に保管されてきました。

今回は、これら中学の頃から30代なかばまで制作され続けた森村の「ものまね習作」を特別に初公開します。そして、森村が影響を受けた作家の作品(高松市美術館コレクションによる)も並べて展示し、当時の思い出をつづった森村のテキストも共に掲示します。巨匠を「まねぶ」(まなぶ・まねるの語源)ことで美術史の大海を泳ぎ、創作上の研鑽を積んだ、森村の前半生の仕事は今明らかになりました！高松市美術館コレクションを題材にした「あつ」と驚く新作も予定しています。 [高松市美術館学芸員 牧野裕二]

| 時 | 記事 | 活動内容 |
|---------------|---|---|
| 2009 | 11/20～12/20: A | 「高松コンテンポラリーアート・アニュアル vol.00」 ギャラリートーク (開催回数のべ8回) |
| | 12/1 | しびのーと 20号発行 |
| 2010 | 1/17・2/21: B | 浅田政志写真ワークショップ「み～んなで家族」(講師: 写真家・浅田政志氏) 見学 |
| | 2/14・2/20: | 糸崎公朗ワークショップ「フォトモでつくる高松の街」(講師: 美術家・糸崎公朗氏) 参加 |
| | 2/20～3/28: C | 「コレクション+(プラス) メタモルフォーゼ!!!! 変身アート」 ギャラリートーク (開催回数のべ14回) |
| | 2/27: D | のびアニキワークショップ「のびアニキを描こう!」(講師: 美術家・のびアニキ氏) 参加 |
| | 2/28: E | 大島よしふみ子どものアトリエ「絵本でへえ～ん・しん!」「袋でへえ～ん・しん!」(講師: 彫刻家・大島よしふみ氏) アシスタント |
| 3/7: F | あきやましんこ子どものアトリエ「カッティングシートで絵を描こう!」「ガラス壁に絵を描こう!」(講師: 美術家・あきやましんこ氏) アシスタント | |

※ギャラリートークは会期中の日曜・祝日、各午前・午後で開催

A 「高松コンテンポラリーアート・アニュアル vol.00」 ギャラリートークを終えて

「高松コンテンポラリーアート・アニュアル vol.00」で、初めてのギャラリートークをさせていただきました。本展の副題は「時をつなぐビジョン」。泡のように生まれては消える時と命を物の中に留め置き、観る人々の感性に伝えて活かしてゆこうという試みでした。その点は芸術に共通することですが、ただ、本展の作家たちは物を材料としてではなく、関わり合って作品を創り出すパートナーとして扱っているように感じました。しばたゆりさんが私の質問に答えて下さった時、私の上衣を瞬時見つめてそっと袖に触れましたが、まるで幼な子に触れるような労りと優しさでした。

[穴戸律子]



B 浅田政志写真 ワークショップに参加して

浅田政志さんは「浅田家」の写真の空気そのままの、温かくて笑いに溢れた方でした。講演会では、浅田さんが作品の撮影エピソードをととても楽しそうに話されるので、お客さんたちも顔がほころんで、愉快的裏話に大きな笑いもおきていました。ワークショップは、写真のシチュエーションや配役、衣装まで細かく決めていくことから始まりました。初めて会った人たちと一つの写真を作っていくことに戸惑いながらも、意見を出し合っていくうちに連帯感が生まれ、楽しくなってきました。撮影当日は、みんな役になりきって渾身の变身と演技で臨みました。浅田さんと参加者全員が気持ちを一つにして、アイデアをぎゅっと凝縮した、思い出に残る写真になりました。

[高松市美術館 藤本圭子]



(左上) 1班: GO! TO! BANK!!

(左下) 2班: あっぱれ! 魔琉蛾雌族(まるがめぞく)見参!! ~高松城のお殿様もびっくり仰天! 元族(総長)は懺悔の還路旅に...~

(右下) 3班: 丸亀街サスペンス劇場「商店街殺人事件。~ちんどんやだけが知っている~」

C 「コレクション+メタモルフォーゼ!!!! 変身アート」 ギャラリートークを終えて

変身というテーマを聞いただけで、子供の頃にままごとで大人に変身したり、ごっこ遊びでヒーローやヒロインに変身した思い出が蘇るようで、わくわくドキドキしましたが、目の前に現れた作品の思いもなかった変身ぶりに面食らうと同時に思わず笑いがこみ上げてきました。トーク中もお客さんから笑いがこぼれる瞬間に、人や物が変身し、空間までがらりと変身させてしまうアートの力がもたらす楽しさを共有できたような喜びを感じました。

[遠山直子]





D のびアニキワークショップに参加して

てっきり目の前でポーズを取る、われらが「のびアニキ」を描くものと思っていたら、「まず僕を皆さんのイメージだけで描いてください〜」と講座室の陰に身を隠した「のびアニキ」の声だけが。本人を見ずに想像で描けと〜？私には「キラキラお目玉」と「少年の心」が彼のイメージ。一生懸命描く参加者たちに「のびアニキ」も「やっぱり隠れているのは寂しい」からと途中から出現。参加の小学生達とのやりとりも楽しく、大人の私達も爆笑のワークショップでした。
[堀本真弓]

E 大島よしふみ 子どものアトリエアシスタントをして



2月28日「ゴリ先生」こと大島よしふみ講師による「変身」をテーマにした、子供むけワークショップが開催されました。前半のグループは「変身絵本」です。本の中央部分で上下に2分割した絵本を作ります。人物・動物・昆虫・植物など身近な題材が上下ページの組み合わせにより「新種の生物」に変身！ページをめくるたびに子供たちの笑顔がはじけます。一方、後半グループは「変身スーツ」です。先ず丈夫な紙袋（米袋）を切り抜き、実際に着用できるベストを作ります。これに思い思いのデザインを注入。さて、みんな何に変身するのかな？わお！忍者・武将・妖精・花・動物…どれも傑作揃いですね！最後は互いに作品を見せ合い親睦もはかりました。もちろん、パパやママにも得意顔でネ！
[大澤宏敏]



F あきやましんご 子どものアトリエアシスタントをして

講師あきやまさんは「変身アート展」で美術館入口のガラスに「流地（りゅうち）」という作品を制作したアーティスト。子どものアトリエでは、あきやまさんが作品で使ったカッティングシートで美術館内の壁やガラスを変身させました。まず午前は、それぞれA3サイズの透明シートに色々な色のカッティングシートを切り抜いて貼っていきます。テーマは生きもの。形を自分で考え、

透明シートに貼っていきます。このシートにはあらかじめ緑のラインがところどころ貼ってあり、そのラインをつなげていくと、みんなの一枚が大きな絵になりました。午後は館内のガラスに細長い形のシートを、隣の人が貼ったところに繋がるように次々貼っていきます。ガラス面にはカラフルなラインや模様が広がっていきました。ひとりひとりが即興で作るものが、ひとつの大きな作品になるという楽しさを体験しました。

[三好ひさこ]

街の中には一体これは何のためにここにがあるのか、どうして役に立ちそうにもない奇妙な物が人知れず存在しています。このように、はからずも出来た無用の物件を赤瀬川はトマソン物件と呼びました。トマソンとはかつて巨人軍に在籍していた成績不振の打者の名に由来しています。

赤瀬川が、知人らと共にカメラを片手にトマソン物件なるものを探すために路上観察を始めたのはバブル直前の1970年代のことでした。その記念すべきトマソン物件第1号を取めた作品をここに紹介します。1972年、四谷の祥平館という旅館の側壁に昇って降りるだけの階段を見つけた。昇り降りするだけでそこには入口が見あたりません。四谷にあったのでタイトルはそのままドローン（なんと「四谷カイダン」。いえいえ、怪談でなく階段の方

（参考文献）赤瀬川原平

『全面自供！』晶文社

「鈴木典之」

いるように観ていない日常生活。もつとゆつくりとした歩みで街中を見まわしてみると今までなんてこともなかった風景が光輝いてみえるかもしれませんね。あなただけの超芸術作品、トマソン物件を探してみてください。

ぼくらは、「こんな面白いことがあるのに、何が閉塞か」…何こともフィールドワークからはじまるんだよ〜と。見て

赤瀬川は当時のことを自身の本の中で次のように書いています。「時代は暗い」とか「閉塞の時代」なんて、論壇でいわれていたんだよね。

赤瀬川は当時のことを自身の

の「四谷階段」（正式名は「真空の踊り場・四谷階段」。もともと冗談からはじめたという路上観察もしいに人々の注目を集め、のちに「路上観察学会」まで結成されます。

Civiが見た！ 高松市美術館コレクション

赤瀬川原平

《トマソン黙示録》「真空の踊り場・四谷階段」

1998年 36.4×51.5cm 高松市美術館蔵



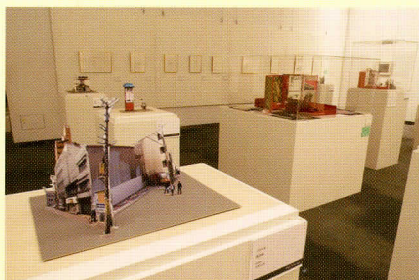


「コレクション+ (プラス) メタモルフォーゼ!!!! 変身アート」 [2010.2.20(土) ~ 3.28(日)] を開催して

会場風景



▲浅田政志「浅田家」



▲糸崎公明「変身は言葉から—デュシャンと対話するフォトモ」



▲のびアニキ「できたらいいな」

昨年度の「音」に続き、今回の「コレクション+ (プラス)」のテーマは「変身」。コレクション作品とゲストアーティスト5人の作品約80点で、現代アートのなかの様々な「変身」を紹介しました。また新たな試みとして、再開発により魅力的な町へと変身し続けている近隣の丸亀町商店街のアートプロジェクトと連携し、アーティストの招聘、ワークショップの開催、広報などについて協力しました。ここでは、5人のゲストアーティストを中心に、「変身アート」展を振り返ります。

浅田政志さんは自身の家族とともに消防士・ラーメン店・選挙運動など様々な職業やシチュエーションを演じ、その様子を撮影する、新進気鋭の写真家。展示されたのは、写真《浅田家》シリーズ、メイキング映像。そして作品の原点とも言うべき浅田家の過去30年分の年賀状。浅田家の皆さんの変身ぶりは、妙にハマっている、あり得ない設定でも、見る者の笑いを誘い出します。関連イベントとして開催された浅田さんのワークショップで（完成作品はp2参照）、参加者と心を通い合わせて楽しく場を盛り上げながら作品を作り上げていく浅田さんの姿を見るにつけ、「人を幸せな気分させる写真が撮れる秘密」を垣間見たような気がしました。

糸崎公明さんは、芸術はわざわざ作らなくても、誰が作ったかはわからないけど、既に街の中にあふれている、という思想を持っておられ、そのような「誰が作ったかわからないけど、いい味を出しているモノや風景」に「非人称芸術」の名前を与え、それらを臨場感豊かに立体的に再現する方法として、様々な角度から撮影した写真を切り貼りする立体模型《フォトモ》を制作しています。

今回糸崎さんは、この「非人称芸術」と似たことを20世紀最大の芸術家のひとりであるマルセル・デュシャンも考えていたのではないかと、との仮説を立て、《フォトモ》と当館所蔵のデュシャン作品を並置する展示を行ないました。デュシャンとフォトモを組み合わせるといふ意表をついた方法で、糸崎さんとデュシャンそれぞれの芸術のメカニズムに迫る、意欲的な展示でした。

のびアニキ (金子良)さんは、会期中高松に滞在し、その間ずっと黄色のトレーナーと半ズボンで美術館や商店街を闊歩していましたので、見かけた方も多いかと思います。出品作品《会って、描いてもらった》は、絵が下手なのびアニキに代わって、展示会出品作を他の人に描いてもらうというもので、幼稚園から大人まで多くの人がのびアニキの姿を描いてくれました。もうひとつは《できたらいいな》というインスタレーションで、ドラえもんの秘密道具をのびアニキ—のび太が作ったらどうなるか、という設定で、タイムマシンやどこでもドアなど様々なアイテムが、日用品をガムテープでつなぎ合わせたようなかなり無造作な方法で作られ、タイの街中で制作した自身の姿を隠すパフォーマンス映像と奇妙な対比を見せていました。散らかり放題の子ども部屋のようなその空間は、見る者に幼少期の記憶を思い出させると同時に、様々な解釈を促したことでしょう（私には、閉塞的な世の中を、のびアニキがドラえもんを生きの力を借りず、自らの力で不器用ながら道具を生み出し、生き延びようとしているように思えました）。

あきやましんごさんはまだ若い高松のアーティストで、入口のガラス扉にカットティングシートで建物と動物・植物が一体化したような幻想的な風

景を作り出しました。5日間に渡り、寒風の吹くなか脚立に登ってはぼひとりで作業し、人々を変身の世界へと誘う入口を見事に完成させた作者の努力に深く感謝します。

大島よしふみさんも高松のアーティストで、エントランスホールに昆虫と乗り物が合体した愉快な《昆虫シリーズ》を展示してくださいました。木と機械部品のハイブリッドな身体をもつバッタ・トンボ・クワガタなど8体の昆虫たちは、展示会初日、商店街ドーム広場でのオープニング式典終了後、勇壮な音楽に見送られ、こけり、接触事故未遂を起こしたり、あるいは乗組員の体力消耗で立ち往生しながらも、商店街を堂々とパレードし、約1時間後にはゴールである美術館へと辿り着き、会期中は週末になると背中の人に寄せ、元気に動き回りました。

今回の展示会では、丸亀町アートプロジェクトをはじめとする商店街スタッフのみなさん、そして美術館=ホワイトキューブと商店街=ストリートという全く性質の異なるそれぞれの空間にあわせて楽しくも刺激的な展示をしてくださったアーティストの皆さんのおかげで、美術館と商店街が「変身」をテーマに緩やかに繋がります。お目当てのアーティストを求めて足を運んでくださった方、通りすがりに思いがけず芸術に触れた方、みなさんの心の中で小さな化学反応が起きて、すこしでも昨日とちがう見方や考え方ができたならば今回の展示会は成功だったと思うのですが、さていかがでしょうか…。

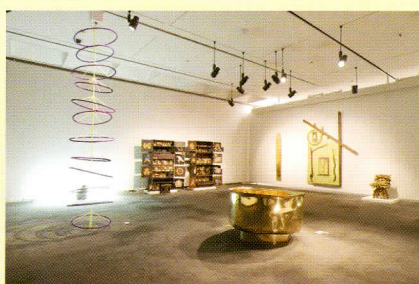
[高松市美術館学芸員 牧野裕二]



▲あきやましんご「流地 (りゅうち)」



▲大島よしふみ「昆虫シリーズ」



▲コレクション作品 (中央に当館初公開の中原浩大(金槌))

ご案内

私たちと鑑賞をご一緒しませんか？

美術館ボランティア「civi (シヴィ)」による
ギャラリートークは特別展会期中の毎日曜日
および祝日の午前11時～、午後2時～の
1日2回、2階展示室にて行います。

発行：高松市美術館 編集：civi & 牧野裕二(高松市美術館)
デザイン：福井裕子(高松市美術館)

高松市美術館 〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4
Tel: 087-823-1711 Fax: 087-851-7250

編集後記

■civiの活動を通していつも、わくわくする発見と、ドキドキする体験をさせてもらっています。心が動く事を「感動」と言うなら、これからも沢山のステキな感動を経験したいです。 [佐々木真理子]
■civi となって半年、週末は大抵@m美術館。隅々まで良さが分り、一段と好きになりました。勉強すべき事がこれから沢山ありますが、その分美術の世界に近づけるような気がします。どうかめげずに続けられますように。 [宍戸律子]
■今年も美術館でみなさんをお待ちしています。たくさんのワクワク・ドキドキできたらいいなあ。 [鈴木典子]
■「花丸図」(若冲)の修復が済み只今公開中。春爛漫のこんびらさんが呼んでいる！ [高木由貴子]

■「絵画の庭 ゼロ年代日本の地平から」を見に、国立国際美術館へ行ってきました。見ごたえのある作品の数々に、感動しきりの大充実な一日になりました。 [遠山直子]
■「変身アート」でお世話になった皆さん—大人数の変身集合写真を見事にまとめた浅田さん、デュシャンとの共演に精力的に取り組んだ糸崎さん、商店街にパフォーマンスや日常生活の一環として出没し都市伝説と化したのびアニキさん、「カットティングシート職人」に徹し素晴らしい美術館の顔を作ったあきやまさん、楽しい体感型作品で毎週末子供たちを魅了した大島さん、そして丸亀町アートプロジェクトスタッフのみなさんはじめ、多くのお世話になった皆さんに、深謝です！ [高松市美術館学芸員 牧野裕二]